

6-7					
主題	“楽しみ”の提供からみるサクセスフル・エイジング				
副題	ネイルケアサロンチームの活動を通して				
キーワード 1	ネイルケア	キーワード 2	チーム	研究(実践)期間	18ヶ月

法人名	社福) 亀鶴会	事業所名	特別養護老人ホーム 神明園
発表者(職種)	高篠沙耶香(介護職員)、澤田美央(介護職員)		
共同研究(実践)者	江連友紀(介護係長)、飯島和枝(介護主任)		

電話	042-579-2711	FAX	042-579-6868
----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	東京の西部に位置する羽村市(人口約5万4千人)に市内3番目の特養として平成11年に開設した従来型施設。定員は120名。居住フロアは2階、3階、4階にあり「地域社会に開かれた園づくり」、「楽しみ」「くらし」～そして「よろこび」の2つを理念に掲げ、全員参加による生活支援の実現を目指している。
-------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

神明園ではおしゃれに興味があり希望する入居者に対して、余暇活動として職員によるネイルアートを不定期で実施していた。実施回数を重ねるにつれ他業務との兼ね合いや人員の都合により、希望があったとしても全員に提供できない、そもそも実施頻度を確保できないといった状況が発生してきた。入居者からは「今月は1回しかできなかったね」と残念がる話も聞くようになり、入居者の「楽しみ」や「整容(おしゃれ)に対する気持ち」に十分に答えられていないのではないかと限界を感じるようになった。その問題を解決するために単なる余暇活動としてのネイルアートではなく、協力者を募り計画的かつ定期的を実施すること、また、職員がユマニチュードの視点をもって行う「人間らしさを取り戻す」ケアとしてネイルアートを提供していくこと、が必要と考えた。そこで、神明園ではこの活動を“ネイルケア”と呼び、活動に賛同してくれたメンバーで〔ネイルケアサロンチーム〕(以下、チーム)を結成した。本研究ではこのようなチームビルドによる入居者への効果と、本活動を目にしたチームメンバー以外の職員が、本活動に対して協力的な意識の変化があるかを考える。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

【目的】生活における楽しみを維持するためのプロセスの一端として、チーム活動の効果が明らかになることで、施設職員が積極的に関わるサクセスフル・エイジングの1つのモデルとする。

【仮説】①チームが定期的に活動することで、入居者の楽しみや職員と話す機会が増える

②チームの活動を目にすることでメンバー以外の職員がネイルケアのみでなくアクティビティやサクセスフル・エイジングに関する興味や関心が高まる

《3. 具体的な取り組みの内容》

チームを結成し毎月2回、定時にネイルケアサロンを開催し、入居者の楽しみ様の変化と、メンバー以外の職員の活動への興味関心の変化を確認した。

調査① 対象者 : チーム結成前からネイルケアサロンに参加し、アンケート内容を理解して回答できる入居者 11 名

調査方法 : チーム結成前と後の入居者の楽しみや職員と話す機会などの違いについてアンケートを行い、気分の変化を観察するためフェイススケールを実施

調査② 対象者 : 職員 46 名

調査方法 : チームの活動を目にしてネイルケアに興味を持ったか、今後の協力意向の有無についてアンケートを実施

《4. 取り組みの結果》

調査①について、全ての入居者がネイルアートの参加を「楽しい」と回答。11 名中の 10 名が「次の開催が待ち遠しい」と回答した。職員と話す機会については、チームとして活動する前は「たくさんある」「少しある」(以下、『ある』との回答と表記)との回答が 11 名中 4 名、「ほとんどない」、「まったくない」(以下、『ない』との回答と表記)が 11 名中 7 名であったのが、チーム結成後は『ある』との回答が 9 名、『ない』との回答が 2 名となった。ネイルアート実施前後の気分の変化として、実施後はもとより、案内の声掛けだけでもポジティブな変化が多くの対象者で見られた。調査②については対象者 46 名中 31 名が回答。チームの活動を見たことによって高齢者へのネイルアートの提供に興味を持ったとの回答が 31 名中 29 名、今後活動に協力したいとの回答が 29 名であった。

《5. 考察、まとめ》

調査①については、チーム結成後に「楽しみの頻度」や、「職員との会話頻度」の増加がみられ、定期開催ができた結果と考えられる。調査②については、多くの職員が高齢者へのネイルケアについて興味を持ち、今後の活動への協力意欲がみられ仮説を支持することになった。これは定期的に行うチームの活動を目にしたことで、ユマニチュードを取り入れたネイルケアは入居者にとって「人間らしさを取り戻す」ことを促進するきっかけになっていると感じたからではないか。実際の介護現場では人員配置や職員スキルの問題で入居者への“楽しみ”を提供しようと思っても、身体介護案件優先となってしまうことや、それが余暇活動を行わない理由付けになってしまうことが多いと感じる現状がある。

本来“楽しみ”というものは人それぞれが持っていて、それを引き出すことも施設職員の役割といえる。チームの結成により基本業務をないがしろにせずネイルケアを定期的かつ継続的に実施し、直接活動に参加していない職員も入居者の変化を目にすることができた。本活動は工夫次第で入居者の“楽しみ”を実現できる取り組みとして少なからず職員の意識改革に貢献できたのではないかと考える。また、こういった取り組みは一過性のイベントで完結させず、継続性を確保してゆくことの重要性もあらためて痛感した。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)、職員に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

- 1) 保科寧子:施設内高齢者における対話・交流の現状と交流ニーズの明確化の試み—施設内高齢者の理解とボランティア導入の支援として—,高齢者ケアリング学研究会誌,Vol.7 No.1 2016
- 2) 堤谷めぐみ 他:化粧やネイルケアが高齢者のライフスタイルや QOL と免疫能の向上に及ぼす影響, コスメトロジー研究報告 1676-86, 2008 他

《8. 提案と発信》

入居者にとって「人間らしい」生活を提供するには特定の職員だけでなく、より多くの職員の協力が不可欠である。今後は今回の活動で興味を持ってくれた職員も関われるような体制を強化し入居者のサクセスフル・エイジングに寄与していきたい。